

Title	紙芝居と〈不気味なもの〉たちの近代
Author(s)	姜, 竣
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/49403
DOI	
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	姜 峻
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 22373 号
学位授与年月日	平成20年6月5日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	紙芝居と〈不気味なもの〉たちの近代
論文審査委員	(主査) 教授 川村 邦光 (副査) 教授 杉原 達 准教授 富山 一郎 北九州市立大学教授 重信 幸彦

論文内容の要旨

本論文の序章では、紙芝居研究の前提となる理論的枠組み、その問題意識が提示されている。近代において発生した紙芝居をめぐる調査・研究と並行させて、その歴史的文脈のもとで、嫌悪・恐怖の感情、また他者の忌避・排除をめぐるケガレ論や異人論における境界や両義性に関する理論を再検討することが課題として設定されている。本論文は3部構成によって、紙人形芝居の社会史的分析、紙芝居・マンガの物語の形態とメディア分析、怪奇・不気味なものに関する学説の批判的な理論的考察がなされている。

第1部第1章では、まず紙芝居の社会史が文献と調査によって辿られる。紙芝居は明治期に紙人形芝居(立絵)から、昭和初期に絵話の形式(平絵)へと変って成立し、失業者の生業として広まる。昭和10年頃には、教育紙芝居、キリスト教紙芝居などが現れ、都市小公園(児童遊園)普及運動が推進され、公園で教育紙芝居が上演されてもいることを論じている。第2章では、紙芝居が隆盛して、警視庁によって統制・規制される一方で、教育紙芝居が街路で生まれた紙芝居を「低俗」とし街頭紙芝居と命名して差異化し、紙芝居を学校教育の中に囲い込んでいき、やがて翼賛紙芝居・国策紙芝居へと転換され、敗戦後にはGHQによって街頭・教育紙芝居が統制・規制されていく過程が明らかにされている。

第2部第3章では、1932年(昭和7)に登場した紙芝居の『墓場奇太郎』やそのパリエーションを取り上げ、この物語が産死の習俗、子育て幽霊譚、曹洞宗系の高僧説話を淵源としていることを明らかにし、また紙芝居の物語を童話や昔話と比較して論じられている。第4章では、1950年(昭和25)前後から60年前後、紙芝居の流行と衰退、マンガの隆盛がみられたが、紙芝居とマンガの怪奇物語「鬼太郎」を比較し、画像を媒介にして、紙芝居と

いうメディアが演者の声による観客とのコミュニケーションに依拠するのに対し、マンガは文字=テキストに依拠することが考察されている。

第3部では、序章での問題提起を踏まえて、民俗学や文化人類学、比較宗教学の学説が批判的に検討される。第5章では、昭和初期に民俗学を創出した柳田国男が「不可測に対する畏怖」を追究した思想的な意味を考察するとともに、フロイトの「不気味なもの」概念と比較して、柳田の民俗学とフロイトの精神分析学が「再魔術化」された近代のなかから生み出されたことが論じられている。第6章では、恐怖や畏怖を論じた聖俗論・汚穢(ケガレ)論・境界論を再検討し、フロイトの「不気味なもの」の概念をクリステヴァのアブジェクション(おぞましいもの)論やアガンベンのホモ・サケル(聖なるもの)論、キットラーのドッベルゲンガー(分身)論を通して再構成している。終章では、紙芝居の作者の加太こうじの生活・行動空間を事例として、これまでの境界論におけ硬直した周縁と中心の二元論による空間認識を批判し、メディアの空間を捉える視座を提起している。

論文審査の結果の要旨

本論文では、昭和初期に発生した紙芝居に関し、文献史料による社会史的分析や調査研究によって、その歴史的展開、またその業者たちの生態や動向を明らかにするとともに、声と画像によって上演される紙芝居というメディアに関わる恐怖・不気味さや境界性などのテーマを文化人類学や民俗学、比較宗教学におけるケガレ論や異人論、聖俗論といった従来の理論を批判的に検討することを課題とし、すぐれて意欲的な論文となっている。

第1に、紙芝居研究のみならず、マンガ研究に貢献する重要な成果であるということが出来る。紙芝居の発生した1930年(昭和5)以降、その歴史的な展開を記述するなかで、紙芝居の発生する場やその担い手、その営業場所に関して、近世から近代初めにかけて雑芸人たちが集まった東京有数の「貧民窟」、すなわち都市下層民の多く集住する地域であることを探り出すとともに、紙芝居独自の生産の仕組みや貸し出しシステムも明らかにし、紙芝居をめぐる都市下層民の生活史・社会史的研究として評価できよう。

第2に、街路から現れた紙芝居が街頭紙芝居や教育紙芝居、キリスト教紙芝居などへと分化していくプロセスが論じられるとともに、紙芝居の物語としての形態とメディアとしての形式が分析され明らかにされている点は評価に値する。1930年代前半のエロ・グロ・ナンセンスの社会風潮を背景とした、紙芝居の残忍さや猟奇性、猥褻さが批判され、児童教育や風紀・秩序を害するとして警視庁の規制・統制の対象となった。だが、紙芝居の話の筋が貸元と業者たちの間で口頭コミュニケーションによって集合的に制作され、また街頭で口演される非文字のテキスト性という特異な媒体であるため、紙芝居の取締りが困難であったことを明らかにしている。さらには、戦後のGHQの規制や検閲に対して、紙芝居の業界が自主的に団体を組織し、紙芝居の内容や質、業者の社会的地位に対する保証を装いながら対抗していった動向も論じられている点が評価できる。

第3に、境界論やケガレ論に見られる、中心・周縁、聖・俗、神聖・不浄といった二項対立的あるいは両義的な理論を、西洋近代がキリスト教を文明の宗教だとして未開宗教に対して抱いた偏見でしかなく、脱中心化・脱周縁化の生起している現代の社会や文化を分

析する理論としてはもはや役立たないものとして批判している。そして、境界論やケガレ論の再構築を行なっている点は、民俗学や人類学、比較宗教学の理論へ寄与するものとして大いに評価できる。

本論文では、紙芝居の歴史や物語・表現に関する実証的な調査研究のみならず、理論的考察が行われているところに大きな特徴がある。紙芝居の展開において、残忍さや猟奇性を際立たせていた街頭紙芝居と対照させて、布教や教化を目的としたキリスト教紙芝居や国策紙芝居を論じることができたなら、紙芝居のもつ娯楽性や教育性、政治性を一層はっきりと浮き彫りにすることができたといえる。紙芝居の物語・表現の不気味さや残忍さに焦点を絞りすぎるあまり、多くの領域で紙芝居の効果として注目された娯楽性や魅力に関する考察が手薄になっていると考える。こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていく課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものであると認定する。